

東稲山（別称：さくら山と東山）

東稲山（別称：さくら山と東山）は平泉から流れる北上川の東側の高さ 594 メートルの山です。その見事な桜で知られているため、平安時代（794-1185）においては桜山としても知られていました。僧侶歌人西行法師(1118-1190)が桜を見つけた時、彼が日本の最も著名な桜の名所奈良県の吉野と対抗しようとしたと伝わっている。

「ききもせず  
東稲山の桜花  
吉野のほかに  
かかるべしとは」

桜の木は俳諧師松尾芭蕉(1644-1694)が訪れた江戸時代(1603-1867)にすべて絶えてしまいました。松尾芭蕉は大きく西行に影響を受けており、東日本旅行に出発したのは西行を真似るためだったとも言われています。紀行「奥の細道」において彼は平泉の失われた栄光に想いを寄せました。

1965 年に、第二次世界大戦の終結 20 周年を記念して巨大な漢字（大文字）「大」が山肌に沿って作られました。この漢字は夏のお盆祭に合わせて花火で照らします。お盆とはこの日に死者がこの世に戻ってくると信じられている仏教の行事で、この火はあの世に霊が戻っていく際の送り出しとして灯されます。

また、大文字は、藤原家や戦で命を失った人々、そして一般の人々の祖先を吊っています。

今日、東稲山は、多くのシャクナゲの花と山頂の展望台で知られています。そこからは、平泉の中尊寺と、衣川と北上川が見えます。